

小田原文学館 特集展示

「村井弦斎の小田原時代」

開催にあたって

小田原文学館では、明治・大正期に活躍した小説家・ジャーナリストの村井弦斎（本名・寛（ゆたか）。文久3年（1864）～昭和2年（1927））を小田原ゆかりの文学者として常設展示で紹介してきました。本展ではこれに新たな資料を加えて、村井弦斎の小田原時代における業績及び作品に描かれた過去の小田原の様子的一端を特集展示として紹介します。

村井弦斎は、東京外国語学校（現・東京外国語大学）、アメリカ渡航などを経て、報知新聞（現・『スポーツ報知』）の客員を務め、後に編集長となりました。村井弦斎は「親子の前で読める新聞」という方針を掲げて家庭小説を連載するとともに、日露戦争の報道等により報知新聞の部数拡大に貢献しました。また、多くの小説を執筆し、特に明治36年（1903）1月～12月に『報知新聞』で連載された「食道楽」は、作中に掲載された和洋中に亘る料理についての豊富な記述が評判となり、「何処の家庭でも大受だった」「日本で能く売れた本と言え（略）弦斎の『食道楽』」といわれるほど好評を得た作品であり、約40の小説と約20の短編、その他多数の随筆や評論を執筆した村井弦斎の代表作とされています。

村井弦斎は、明治35年（1902）～明治37年（1904）に小田原に居住しました。この時期は、「食道楽」が執筆された時期でもあり、村井弦斎が人気作家として確固たる地位を築いた時期といえるでしょう。また、「食道楽」には酒匂川で獲れる鮎についての記述があり、明治期の小田原の姿をうかがうことができます。

本展を通じて、小田原の歴史や文化により一層興味を深める機会となれば幸いです。

平成24年7月 小田原市立図書館



『食道楽 春の巻』口絵「大隈伯爵邸台所の図」（報知社出版部、明治36年。解説は3頁）

第1章 村井弦齋と小田原

村井弦齋は明治35年(1902)に大磯から小田原町十字(現・小田原市南町)へ転居しました。明治維新の後、小田原は伊藤博文など政治家をはじめとした人々の交流の場として栄えるようになり、『魔風恋風』などで知られる小説家の小杉天外や、天外が師匠と慕っていた小説家の斎藤緑雨が居住していました。弦齋が小田原に転居した理由は分かっていませんが、文士同士の交流を求めているのかもしれませんが、弦齋は小田原の地で「食道楽」の執筆を進めると同時に、天外・緑雨と交流を深めたようです。

『食道楽』がベストセラーとなって多額の印税が入ったことや、明治35年(1902)の大海嘯(だいかいしょう)によって家が被害を受けたこともあり、弦齋は明治37年(1904)に平塚町平塚(現・平塚市八重咲町一帯)に土地を購入して、小田原から転居しました。

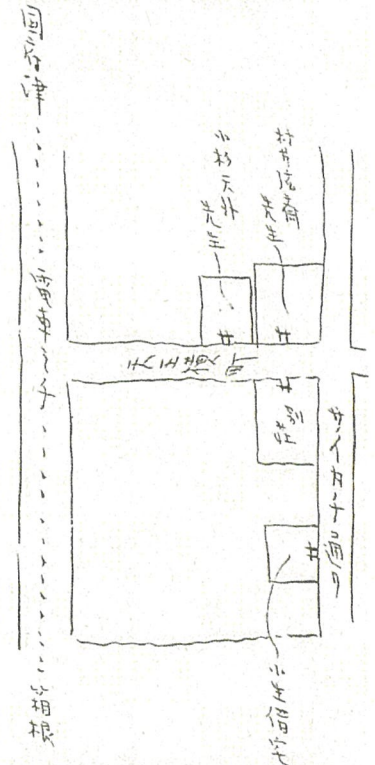
1-1: 斎藤緑雨自宅案内図

斎藤緑雨が描いた自宅への案内図です。緑雨の家の近所に村井弦齋が住んでいたことが分かります。

緑雨が小田原居住時に書いた「小田原日記」には、「村井氏を訪ふ」「村井氏来る」といった記述があることから、頻りに互いの家を行き来していた様子がうかがえます。

◎図版:『斎藤緑雨全集 巻八』(筑摩書房、平成12年)493頁
幸徳秋水宛書簡 明治35年(1902)6月22日

◎参考文献:石井富之助『小田原と文学』小田原文芸愛好会、平成2年



1-2: 大海嘯の様子(明治35年(1902))

「海嘯」とは、「海鳴りを伴いながら海岸に波が押し寄せてくる」ことです。

明治35年(1902)9月28日、小田原は大海嘯に見舞われました。「潰家五百戸、浸水家屋二千戸、負傷六十名」など小田原町をはじめ海岸線に面した小田原市域は大きな被害を受けました。

村井弦齋の娘、村井米子はこの時の様子について「大洪水の河水が、庭の松林に寄せ、材木など竹垣の外を流れてゆく」と後に記しており、被害の大きさがうかがえます。

◎図版:『目で見ると小田原の歩み』
(小田原市役所、昭和55年)235頁



小田原町十字安米館(現・小田原市南町)付近

◎参考文献:
・『復刻版 食道楽 解説編』柴田書店、昭和57年

第2章 「食道楽」の世界

明治期の最も長い小説といわれた「日の出島」の連載を終えた村井弦斎は、百の小説を書き連ねて一つの小説とする「百道楽」という構想を打ち出しました。

この一環として明治36年(1903)に『報知新聞』に連載されたのが「食道楽」です。

舞台は明治30年頃の東京の上流家庭で、主人公は、「腹ばかり太鼓のように膨れて」いて、「その大きな腹は残らず胃袋」という文学士の大原満と、同級生の妹で料理が上手なお登和です。二人は惹かれあうものの、大原の親が決めた許嫁のお代が現れるというストーリーになっています。

「食道楽」の特徴は、和洋中の料理についてレシピや食材の見分け方、保存法、台所道具などの情報が豊富に盛り込まれていることです。また、敢えて大食漢を主人公にすることで、不摂生な生活を戒め、健康的な食生活を送るべきと説いており、啓蒙小説としての側面がうかがえます。

当時、『報知新聞』は政治記事や論説中心の内容から「親子の前で読める新聞」を目指して紙面の転換を図っていました。このため、「食道楽」は実用的な料理記事として主婦を中心に反響を呼び、単行本は10万部以上を売り上げるとともに演劇に翻案されて歌舞伎座で上演されました。

2-1-1: 『食道楽 春の巻』

「食道楽」は連載後、「春の巻」「夏の巻」「秋の巻」「冬の巻」として単行本が出版されました。本の完成を印刷所の前で待つ書店の使用人同士が、自分の店に少しでも多く仕入れようとして喧嘩になったり、本のとじ糸の在庫が払底したりしたといわれており、人気ぶりがうかがえます。

各巻には口絵がついています。「春の巻」の口絵では、当時「広さ五十坪といわれ理想的設備」とされていた大隈重信邸の台所の様子が描かれています(1頁参照)。村井弦斎の妻・多嘉子の父親は、大隈の従兄弟に当たることから、交流があったようです。弦斎は「食道楽」の執筆当初、多嘉子が作る家庭料理を題材にしていました。これに対して大隈が「料理があれではいけない。うちのコックを貸してやろう」と、コックを弦斎の家に派遣したというエピソードがあります。

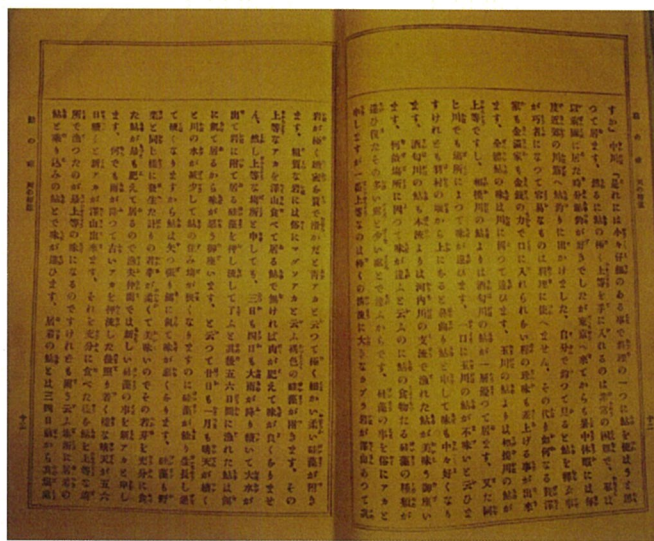
◎参考文献：平塚市教育研究所編『平塚小誌』平塚市、昭和27年

2-1-2: 『食道楽 秋の巻』

「秋の巻」には、鮎料理についての記述があります。玉川の鮎より相模川で獲れる鮎の方が美味しく、更に、酒匂川で獲れる鮎の方が美味しいといったことや、酒匂川で獲れる鮎は色が青くて脂肪が少ないため寿司に向いており、山北停車場や国府津停車場で鮎の寿司が売られているといったことが述べられており、明治時代の小田原の様子的一端がうかがえます。

◎参考文献：

- ・山本武利『近代日本の新聞読者層』
法政大学出版局、昭和56年
- ・佐々木隆『日本の近代14 メディアと権力』
中央公論新社、平成11年
- ・『よみがえる村井弦斎』展図録、
平塚市博物館、平成12年
- ・『御殿場線物語 旧東海道本線各駅停車の旅』
文化堂印刷、平成13年
- ・黒岩比佐子『『食道楽』の人 村井弦斎』
岩波書店、平成16年
- ・同『食育のススメ』文藝春秋、平成19年
- ・『食道楽』全二巻、岩波書店、平成17年
- ・『山北町史 通史編』山北町、平成18年



◎図版：『食道楽 秋の巻』(報知社出版部、明治36年)

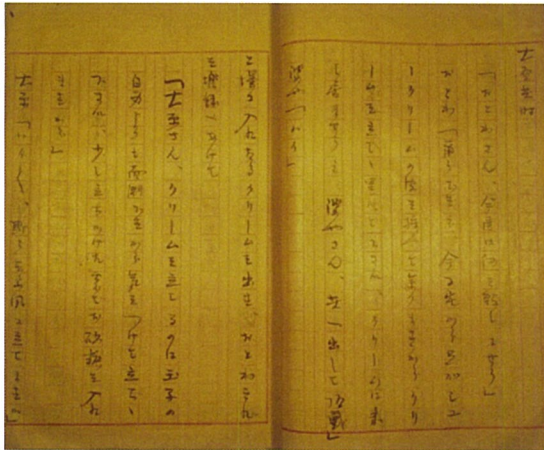
2-2: 『脚本 食道楽』(明治38年(1905)頃)

『報知新聞』1万号記念として『食道楽』が歌舞伎座で上演された時の脚本と思われます。公演では『報知新聞』の切抜きを持参した観客は定価の半額で鑑賞できるサービスが行われました。

この資料は冒頭部分のみですが、主人公・大原満の両親が上京するため、お登和に頼んで「大御馳走を拵(こしら)える」というストーリーであることがうかがえます。

掲載部分は、お登和がシュークリームを作っている場面です。当時の記録によれば、実際に舞台上でシュークリームを焼いてみせるとともに、お登和を演じた六代目尾上梅幸が、特別席の観客にシュークリームを配ったそうです。

◎参考文献：伊原敏郎『歌舞伎年表 第八巻』岩波書店、昭和38年



大原此時
 「おとわさん、今度は何を致しませう」
 おとわ「爾うですネ、今に宅から兄がシュークリームを皮を持って参りますからクリームを立てて置いて下さい、クリームは来て居ませうネ、婆やさん、此へ出して頂戴」
 婆や「ハイ」
 と壁に入れたるクリームを出す、おとわそれを兜鉢へあけて
 「大原さん、クリームを立てるのは玉子の自身よりも面倒ですから気をつけて立て下さい、少し立ちかけた所でお砂糖を入れますから」
 大原「ハイハイ、斯う云ふ風に立てますね」

2-3: 『脚本 阿古屋及食道楽』発売時の広告

『脚本 阿古屋及食道楽』は『報知新聞』に連載され、その後書籍化されました。この資料は明治25年(1892)に黒岩涙香が創刊した新聞『萬朝報』に掲載された、『脚本 阿古屋及食道楽』発売時の広告です。脚本の内容について「お登和嬢の料理実習、大原文学士の自然的滑稽及お代嬢の田舎気質など従来の劇に先例無かりし」と宣伝されています。

「歌舞伎座二階新橋堂出張所にてても発売致し候」と書かれていることから、前日から「食道楽」の上演が行われた歌舞伎座でも同時に脚本が販売されたことがわかります。

◎図版：『萬朝報』明治38年(1905)2月17日



凡例

- ・この小冊子は平成24年(2012)7月21日(土)～9月30日(土)を会期として小田原文学館で開催する同名展示の解説書です。
- ・本展開催及び本冊子作成にあたり、(株)筑摩書房・県立神奈川近代文学館・平塚市博物館のご協力を賜りました。ご芳名を記し、感謝申し上げます。
- ・本冊子の編集及び執筆は小田原市立図書館学芸員の鈴木一史が行いました。
- ・史料引用の際、適宜新字体等に改めた箇所があるとともに、敬称等は省略しました。
- ・展示内容と本冊子の内容は異なる場合があります。
- ・特にことわりがない限り、資料はすべて小田原市立図書館所蔵です。

平成24年7月発行 小田原市立図書館(禁無断転載)